

## 仏教の福田思想と社会事業



花 田 順 信

両方面が展開してきたのである。

一

仏教の使命は、仏陀の慈悲の精神にもとづいて、社会の人々がこの世に生きていく上の精神的物質的ならゆる苦悩を除き、生活がより豊かに、より安らかになることを実現しようとする慈悲の宗教であり、救済の宗教である。したがってその慈悲の精神の発露するところ、人々の社会生活の諸方面において、具体的に人々の貧窮、病苦、孤独、厄苦などを救う救済活動と、人々の社会生活の便益、向上をはかるための土木、交通、住居などの社会公益事業との

このような社会的救済活動は基本的には慈悲の精神、利他の精神によるけれども、他面また原始仏教から大乘仏教に至るまでひきつづき強調されてきた福田思想によるものである。またもう一つは大乗戒（三聚淨戒）（注1）が成立し、その中の饒益有情戒をたもつということで、多くの社会救済事業をなすべきことが強調された。このように直接的には福田思想や、饒益有情戒の精神に導かれて、インドの社会において活発な救済事業が行われた。そして仏教が中国に伝えられると、中国仏教史上、また社会救済事業が盛んに行われたことは諸文献にみられるところである。

このような社会的実践を伴った仏教がわが国に伝えられるや、仏教の初伝のころから注目すべき仏教的社会事業が行われた。それは仏教伝来以前には顕著にみられなかった現象であり、仏教によってはじめてわが国に救済活動、公益事業の眼が開かれたといってもよいであろう。仏教は日本社会事業の草分けであるとともに、明治の維新にいたるまでは、社会事業といえば、寺院や僧侶の専売特許といった感をさえ呈するものであったことは否定できない。

古くは聖徳太子の悲田院、光明皇后の救癩の慈愛、行基、叡尊、忍性、重源の事績等今日なお僧名や寺院名、あるいは仏教的名称を残している道路、橋、その他の施設は、歴代の高僧が大衆の帰仰を得てその心血をそそいだ賜物である。仏教社会事業の歴史は古い。そして、その事業は注目に値するものがあるといつて過言ではないであろう。

このように見てくると、仏教伝来以来、日本仏教の発展に伴って、僧侶や信者たちの慈悲の精神の昂揚とそれの社会的実践として、社会救済事業と土木公益事業の両方面にわたってめざましい活動が展開したのである。

## 二

上求菩提下化衆生は大乗仏教の綱格であつて、下化することは上菩提を求めんがためである。下化の精神を拡充すれば、衆生の靈肉両面の救済におよばされる訳である。これは仏教社会事業の成立する基盤である。さらにその基盤の奥深く源泉を追求すれば、「福田」思想に到達することができる。

福田とは、福行をなす対象であり、この対象を供養することによって自己の将来の福を生ずる源泉・根拠となるものである。たとえば、福行という糧を蒔いて、田地福樂の收穫を求めるときである。

福田は本来、仏陀を福田とみなしてこれを供養し福を得るといふのが最初である。仏への供養がすぐれた果報をうることになるのは、仏が生きとし生けるものにとつての良福田であるからであるとして、『大般涅槃經』に、

「苦し諸の人天、此において最後に我を供養せん者は、悉く皆<sup>ま</sup>當に不動の果報を得、常に安楽を受くべし。何を以ての故に。我は是れ衆生の良福田となるが故なり。

汝、若しまた諸の衆生の為に福田とならんと欲せば、速かに所施を弁ぜよ。久しく停るべからず」<sup>(注2)</sup>

仏陀をさして、上福田、良福田、福田の最たるもの、世間の良福田、無上の福田などと呼んでいる。

ついで、仏を福田とする考えが拡大されて、サンガならびにサンガに属する仏弟子や修業者を福田と呼ぶようになった。

「如来の聖衆は敬い貴ぶべきものである。これは、世間の無上の福田であるからである」 「世間の福田とは、これ如来の聖衆をいう」 (『増一阿含』)

又、三法(律義、善法・四諦)に通達した比丘を無上福田と呼ぶ。四法、五法、六法(以上、『増支部』經典)、十法(『中部』經典等)を成就した比丘を無上福田とする。また七輩(『増支部』經典)を無上福田とする。

サンガのなかの賢聖人を無上の福田とするということは、「世尊の弟子たちのサンガは、世間の無上の福田として、供養され、歓待され、布施され、合掌されるべきものである」と。阿含經典等を通じて知ることができる。

布施の行為を重ずるということは、やがて、布施される

施物そのものの重視となった。施物には、戒律をたもって修業する比丘に布施し、かれらの必需品となる飲食・衣服・臥具・医薬の四資具がある。そのほか、車乘・華鬘・薫香・塗香・床具・房舎など種々なささげものがあつた。また、サンガが拡大され、精舎等に共住する生活となると、必然的に諸の施設物が必要となった。サンガ全体に対して、信者の布施する施物二十一種が数えられている。サンガの内部の施設に関する布施、施設外部に対する布施等、いろいろの設備が随時、必要に応じて布施されている。このようなサンガへの施設物が施物の主なものになると、これまで考えられていたサンガを福田とする見方が転じて、サンガにささげる施物そのものが福田であるとされるにいたつた。

『摩訶僧祇律』は、天・人中に生まれるための福田として次のごとき施物福田を数えている。

「曠路に好井を作り、園果を種植して施し、橋船もて人民を渡し、布施し淨戒を修し、智慧もて慳貪を捨せんには、功德日夜に増して、常に天・人中に生ぜん」と。<sup>(注3)</sup>

(福田思想の發達及び種類等については早島鏡正著『初期仏教と社会生活』に詳述されているので参照されたい)

福田の發達は、菩薩精神の高揚、すなわち四摂六度の行願を果遂しようとする利他的慈悲の精神によって、著しくその内容を深めてゆくことになった。ことに六度の最初にある布施行が、菩薩行の重要な修業徳目の一であつたから、福田と密接不離な關係を持つて大乘仏教の実践面を強調することになり、従つて布施行に対するもろもろの考察が精細を極め、仏・菩薩の學としての大乗仏教が鮮明化されてゆくことになるのである。

布施行の根底は、菩薩の利他の精神にある。しかも、それは慈悲の行為の發露するところである。この慈悲と布施の実践が菩薩の必須要件とされ、具体的には、福田を媒介として菩提の資助たる根拠が示され得ることとなつた。

『優婆塞戒經』の中で、菩薩が自と他とを莊嚴する修習について、それを二種に分け、かつ六度に配当している。すなわち、福德莊嚴（施・戒の精進）と智慧莊嚴（忍・定・智慧）とし、この二種莊嚴を可能ならしめる正因は、慈心と悲心であると説く（二莊嚴品十一）<sup>(注4)</sup>。

そして菩薩が布施を行なうに際して、二種の田を觀察する。一には福田、二には貧窮田<sup>ひんきうでん</sup>である。前者は、(1)無上の妙智慧を増すため、(2)報恩のため、(3)煩惱を捨ててため、(4)一切の樂の因縁を増長するための故に福田に布施し、後者は、(1)菩薩が福德を増そうと欲するため、(2)憐愍を生ずるため、(3)功徳を成ずるため、(4)一切の苦の因縁を捨てよと欲するための故に貧窮に布施する。

貧窮田とは同経（供養三宝物第十七）に、

「世間の福田に凡そ三種有り。一に報恩田、二に功德田、三に貧窮田なり。報恩田とは所謂の父母・師長・和上なり。功德田とは煖法<sup>ぬゑんぽう</sup>を得るより乃至阿耨多羅三藐三菩提を得るまでなり。貧窮田とは一切の窮苦困厄の人なり。」<sup>(注5)</sup>

という説明によって明らかである。この三福田を三宝に配して、如来世尊は報恩田と功德田、法もこの二福田に相当し、衆僧はそれに貧窮田を加えた三福田に相当するともいっている。

又、貧窮田に関する考察は、同経（名義菩薩品第八）にて、

「若し財少なき時は先に貧窮に給し後に福田に施し、共に貧苦の爲にし、後に富者のためにし。」<sup>(注6)</sup>

といい、同じく受戒品第十四に説く二十八失意罪の第三は、不瞻病苦罪、すなわち、優婆塞が戒を受持しおわつて、汚悪して病苦を瞻視<sup>せんし</sup>することができないならば、この

優婆塞は失意罪に該当すると規定されている。<sup>(注7)</sup>さらにま

た、第二十八失意罪は優婆塞が路を行く場合、病者を偶見して、ためにその者の傍に往つて瞻視し、方便をなして所在に付嘱することをせずして捨て去るならば、行路病者放棄罪にふれるとしている。<sup>(注8)</sup>

『梵網經』の不瞻病苦戒は、

「一切疾病の人を見ては、常にまさに供養すること仏の如くにして異なることなかるべし。八福田の中、看病福田

はこれ第一の福田なり。若し父母、師僧・弟子の疾病・諸根不具・百種の病、苦惱あらば、みな供養して差えしむべし。しかるに菩薩、悪心、瞋恨の心をもって、僧房の中・城邑・曠野・山林・道路の中に至り、病めるを見ても救済せずんば、輕垢罪を犯す」<sup>(注9)</sup>

と説いている。八福田の一名の名称については「八福田諸

仏聖人一一師僧父母病人」<sup>(注10)</sup>とあるので明示せられていない。

八福田の一名についての中國諸高僧の所説についてみると、智顛の『菩薩戒義疏』<sup>(注11)</sup>卷下には、

(一) 仏 (二) 聖人 (三) 和尚 (四) 阿闍梨 (五) 僧 (六) 父 (七) 母 (八) 病人

とあり、また智周の『梵網經菩薩戒本疏』<sup>(注12)</sup>第四には、

(一) 仏 (二) 法 (三) 僧 (四) 父母 (五) 師僧 (六) 弟子 (七) 諸根不具 (八) 百種苦

の名を掲げている。また、『梵網經菩薩戒本疏』<sup>(注13)</sup>第五に引用されている「有人の説」にはつぎの八を福田として挙げている。

(一) 造曠路美井 (二) 水路橋梁 (三) 平時險路 (四) 孝事父母 (五) 供養沙門 (六) 供養病人 (七) 救濟危厄 (八) 設無遮大会

『諸徳福田經』には、

「仏天帝に告げたまわく衆僧の中、五の淨徳有り、名づけて福田と曰う、之を供すれば福を得、進んで成仏すべし」

と説き、その五とは、

「一に発心して俗を離れて道を懐佩かいはいするが故に、二にはその形好を毀ちて法服に応ずるが故に、三には永く親愛に割れて適莫無きが故に、四には軀命を委棄し衆善に遵ふが故に、五には大乘を志求して人を度せんと欲するが故なり」(注14)

であって、これは僧が福田として、恭敬せられる所以をなすものである。さらに、

「七法有り、広く施すを名づけて福田と曰う、行ずる者は福を得て即ち梵天に生る」

と述べている。その七とは、

「一には仏図僧房堂閣を興立す、二には園果浴池樹木清涼、三には常に医薬を施して衆病を療救す、四には牢堅の船を作つて人民を濟度す、五には橋梁を安設して羸弱を過度す、六には道に近く井を作り渴乏のものに飲むことを得しむ、七には圜廁かはやを造作し便利する処を施す」(注15)

と、七福田を立てて、消極的な惡に対する救済ばかりではなく、更に進んで「福善を修す」ことの必要を説いている。

「塔を起て、精舎を立て、園果、清涼を施し、病むもの

は則ち医薬をもつて救い、橋船をもつて人民を度し、曠野に好井を作らば、渴乏する身を安くするを得、所生の甘露を食し、無病にして常に安寧ならん、廁を造りて清浄を施し、穢を除はば輕悦を致し、後には便利の患なく穢悪なる者を見ること莫し、譬へば五河の流れの如く、晝夜に休息すること無し」(注16)

#### 四

仏教社会事業が平等の慈悲という仏教の根本精神に立脚していることは事実であるが、ここに仏教社会事業の在り方とその特色が見出されなければならない。したがって、仏教社会事業は、物的なものを中心として、富めるものから貧しいものへ、強きものから弱きものへというような高下の立場に立つ単なる救済事業ではない。仏陀の教えを自他ともに信じ信ぜしめていくところの、自利即利他、利他即自利の平等観によるものであり、社会事業は、そのまま自己の仏道修行の道場でなければならぬ。即ち自己の仏教的な生活が他者への社会的救済活動となるということである。この救済活動は、精神的と物質的との二面を同時に

っている。現実における人間生活がより文化的、より宗教的ならしめられるのは、菩薩の慈悲と空觀を根拠とする利他の活動とによるものである。したがって、菩薩にとつては福田は無数にあるといふべく、何らの功德をも求めようとすする心をいだかず、ひとえに福田行を実践するものであるといえよう。

近時、社会福祉精神の高揚は、社会事業への異常な関心となり、国家事業や公共事業の増強をはじめとして、一般民間人のなかにも、社会事業熱といったものが高まりつつあることはよろこばしいことである。しかし、もしこれらの社会事業の中に、慈悲の精神、人間愛の精神が欠除し、あるいは稀薄であるとしたならば重大な問題である。かつて日本仏教がなしたげた偉大な精神的社会事業が再認識、再評価されなければならない。社会事業の正しい在り方を、世にそして社会人に認得せしめることであらう。

(仏教大学助教授・社会福祉学)

#### 注

- 1、三聚淨戒Ⅰ一、攝律儀戒Ⅱ、攝善法戒Ⅲ、攝衆生戒(饒益有情戒)

- 2、『大般涅槃經』(大正藏二二卷三七五頁下)

- 3、『摩訶僧祇律』(大正藏二二卷二六〇頁下—二六一頁上)
- 4、『優婆塞戒經』(国訳一切経律部十二卷一—二頁)
- 5、『同 經』(国訳一切経律部十二卷一—三三頁)
- 6、『同 經』(国訳一切経律部十二卷 九九頁)
- 7、『同 經』(国訳一切経律部十二卷一二六頁)
- 8、『同 經』(国訳一切経律部十二卷一二八頁)
- 9、『梵網經』(国訳一切経律部十二卷三三九頁—三四〇頁)
- 10、『同 經』(国訳一切経律部十二卷三四四頁)
- 11、『菩薩戒義疏卷下』(大正藏四〇卷五七七頁)
- 12、『梵網經菩薩戒本疏第四』(大正藏四〇卷一〇五頁)
- 13、『梵網經菩薩戒本疏第五』(大正藏四〇卷六三九頁)
- 14、『諸徳福田經』(国訳一切経集部十四卷四四一頁)
- 15、『同 經』(国訳一切経集部十四卷四四二頁)
- 16、『同 經』(国訳一切経集部十四卷四四二頁)

#### 参考文献

- 『初期仏教と社会生活』 早島鏡正著 岩波書店  
『仏教社会事業の研究』 守屋 茂著 法蔵館  
『現代人と仏教』 藤原了然著 隆文館  
『日本浄土教文化史研究』 伊藤真徹著  
仏教大学伊藤真徹先生 古稀記念会  
『大法輪』 一九七一年三月号(勝又俊教東洋大学教授論文)